

ドン・ジュアンに観るバイロン像(9)

楠 本 哲 夫

‘One is slain & one is fled’

この場面は ジュアン (バイロン) に, Shooter’s Hill での〈追はぎ〉との出会い として 先ず, ちぐはぐに 闖入してくる。ジュアンは 追はぎ を殺す。そして このことで 彼自身の中にある vitality (活力的, 重大なるもの) を 抹殺するのである。

ある意味で 〈追剥のエピソード〉 は 年老いてゆく自然児, ジュアンの最後の喘ぎなのである。追剥は ジュアンにむかって ‘Stand and deliver!’ と命ずることに よって ジュアンから his money and his worldly baggage (彼の財宝と 世俗的, お荷物) を 奪いとろうとする。しかし ジュアンは——今, カザリンのものである ジュアン—— この追剥を一発で うち殺す。射ち殺すことによって ジュアンはこの追剥を, つまり, 自然児 ジュアンを 抹殺し, 且つ止揚しようとしたのである。

ジュアンは この場合, 射ち殺す行為の主体であり 同時に 客体なのである。ジュアン と 追剥 は 同一人物なのである。

But ere they could perform this pious duty,

The dying man cried, ‘Hold! I’ve got my gruel!

Oh! for a glass of max! We’ve miss’d our booty;

Let me die where I am!’ And as the fuel
Of Life shrunk in his heart, and thick and sooty
The drops fell from his death-wound, and he drew ill
His breath, — he from his swelling throat untied
A kerchief, cying, ‘Give Sal that!’ — and died. (XI, xvi)

だが 彼らが敬虔な義務を 果し得た前に

死にゆく男は叫ぶ ‘そのまま！ 俺は嚴罰をうけたんだ！

ああ！ 一杯のマックス酒が欲しい！ 分捕品はとり損ねた。

この場で死なせろ！ そして^{いのち}生命の燃料 が

心の臓の中で 尽きんとし だろどろと 燻^{すす}けて

致命的傷口から 最後の^{したた}滴りが 落ち

呼吸困難に なりながら——^{ふくら}膨みゆく喉の

ハンカチを^{ほど}解き、叫ぶ ‘サールにこれを渡してくれ’ ——そして^{いき}息絶えた。

the Gospel 福音（キリスト教の教）の物語が ここでは 逆にされている。
即ち、Paradise 楽園へのチャンス、主導者に、彼の最後の、とても人間的、
要求を遂行するに当って 提供するの は まさに ^{いき}息を ひきとろうとする
盗賊 なのである。

The cravat (stained with bloody drops) fell down
 Before Don Juan's feet: he could not tell
 Exactly why it was before him thrown,
 Nor what the meaning of the man's farewell. (XI, xvii)

血に汚れたスカーフが ころげおちていた

ジュアンの足許に。 彼には、はっきりと

解らなかった、なぜ 自分の前になげられたか

そして男の袂別のことばの意味したものも。

だからジュアンには 応えられぬ。 たとえくこの男の最後にのこした言葉の意味をジュアンが解し得たとしても、^{サル}Sal を 追いつめて捕えることは不可能なことだったのであろう —— それは、バイディーの島での あのもとの 無垢の 相 を回復すること同様、不可能なことだったろう。

かくて ジュアンは 彼の最終場面へと 進みゆくのである——悦びの中を誇りに充ちて——。(それは ジュリアの祝福の新しい領域、そして 呪いの手紙が ここで^{あは}露かれる) 最後の、少なくとも 著者の前に、この叙事詩が進展しゆく限り、主人公の死がこの叙事詩をプツリと 絶ちきるのである。

英国が、スペイン、ギリシア、トルコ、ロシアではとても考えられぬような 剽々と^{ひろが}展りゆく空念仏、虚偽の世界を ^{あは}露きたててゆく。彼の戦車は 雷鳴の轟く中を うまく^そ外れることのできぬまま ^{大鼓}ドラムの中を 勇猛に 轟音を立て 進み続ける。

Through Groves, so called as being void of trees,
 (Like *lucus* from *no* light); through prospects named
Mount Pleasant, as containing nought to please,
 Nor much to climb; through little boxes framed
Of bricks, to let the dust in at your ease,
 With 'To be let,' upon their doors proclaimed;
Through 'Rows' most modestly called 'Paradise',
Which Eve might quit without much sacrifice. (XI, xxi)

林を通りぬけ、謂うなれば樹木のない

(筋の通らぬ 話しの如く) '快樂の山' という

名の展望をよぎり—— 歓びのない、

労して登ることもない—— ちっちゃな練瓦^{れんが}

の箱 (扉に廃棄用と書かれた) の傍^{そば}を抜け

—— 気楽に 塵^{あくと}を投げすてながら——。

謙虚に呼べば楽園^{パラダイス}なる街^{まち}を通りぬけてゆく、

—— Eve^{イヴ}なら犠牲を避けて立ちよらぬ

轟音を立てて戦車は計画されたみちを進みゆく。'rows' and 'prospects' は

現実を嘲笑する。‘Paradise’のテーマは これまでのところ 根底にあるバイロン神話であり、^{だらく}墮落した、下品なものである。かくして‘假面の 見せかけの 世界’へと 準備させられるのであるが ジュアンはその世界へと投げ出されることになるのである。

その間 一方において 世界は 移りゆく

本能的欲望の中で ^{じやり}砂利をしいた道の上で

過ぎ去った過去、そして来るべき未来の

ブリテンの聖なる場所ですら 今はもう荒廃してしまった。若き日のバイロンにとって 適していた <きちんとして じっくり溶けあっていた 優雅さ> の意義を 我々が しかと悟っていさへすれば 我々は、 ウェストミンスター アベィについての バイロンのコメントの<ホロ苦い味> を 無価値な納骨所として 評価できるのであろうのに。

ここに 離反、不満の場所がある。

The Druids' groves are gone — so much the better:

Stonehenge is not — but what the devil is it? —

But Bedlam still exists with its sage fetter,

That madmen may not bite you on a visit;

ドルウィド教僧侶の森はもうない——それだけよい

環列石柱* はないが—— 一体それは何なのだ？

精神病院
ベッドラムは 今なお 思慮深い足枷と共にあり

おとな
訪うものに 狂人が 噛みつかぬためなのだ

* 英国 Salisbury 平原にあり、有史以前 の 二重円陣の 巨石柱の一群

The Bench too seats or suits full many a debtor;

The Mansion House, too (though some people quiz it),

To me appears a stiff yet grand erection;

But then the Abbey's worth the whole collection. (XI, xxv)

ベンチも多くの債務者に適^{ふき}わしく席を設け

ロンドン市長官邸もしかり（耶喩する者もいるが）

私にとっては映る、固い、壮大な建物に

それなら この寺院は凡ての蒐集物に値する

Canto IX の ‘telerriuma belli causa’ スタンザの中に掲げた文句の官能的遊戯が これまでに この詩の主要な工夫となっている。この旋律が 凡ての‘政治’ ‘宗教’ ‘哲学’ の‘真剣な’ 議論を 収縮的諷刺 をこめて力説 強調 対照 させている。

〈ドン・ジュアン〉の〈英国編〉は、一連の平価切下を通して 進みゆく。この用語は 金銭的含意をもつものだが、正確であり、適切である。バイロンは 先ず、流行の価値を切り下げる。というのは —— ‘流行／それは我々、思考する人間に情熱の追求の排除に 役立つ。(XXXiii)

それは 諷刺的に考えることの権利を認める。(XXXiv)そして

‘政治家及び 彼等の二様の態度、看板——嘘で生きる、しかも 敢て嘘をつく勇氣はもたぬ’ —— (XXXvi) の思考の権利を、諷刺的には認めるのである。

その権利追求の価値の評価を切り下げようと 諷刺的に 強調、力説するのである。

というのも 結局、嘘とは 何もの？ と彼は 問いかけるのである。

‘それは 結局、〈假面を被った 真実〉’ に過ぎないのではないのか’ (XXXviii)

——即ち、人間の、食欲、にとっては とても口当りの悪い現実という〈規定食〉への、必要な 〈風味〉 に過ぎぬのである。

これら英国編の最終篇は、主人公が ヴィクトリア王朝も間近い、英国の冷やかな周辺を一過してゆくところを、冷い石化した相を まのあたり目撃させるのであり、そして、1821年2月16日 付、ラヴェンナからのジョンマレーに宛てた手紙の中で 詳述している一連の假面を 一つ一つ そのまま、とり上げ 再現し 描き 続けている。

その手紙の内容は次の如くである。

‘僕は 攻囲と戦闘と冒険を適当にミックスして ジュアンをヨーロッパの旅へと連れてゆく そして フランス革命の ^{はびこる水草的悪魔} Anacharsis cloots として彼を終らせることを意図した。この詩の幾篇にわたって展界し 描きつづけるかが 僕にはわからぬし また (たとえ書きかえる日まで 僕が生命があるとしても) これを完成 (未完とせず) するか どうかもわからぬ。

しかし 次のことが 僕の考えだった。つまり、僕は ジュアンをイタリアでは キャバリエル セルヴェンテ とするつもりだった、そしてイングランドでは <a cause for a divorce>, ドイツでは <a Sentimental werther-faced man> に 仕上げるつもりだった。その結果、 それらの国々での夫々の社会の異った嘲笑を描出して、 かくして 彼が除々に長ずるにつれ— 当然自然の姿なのだが— 彼に *gaté and blasé* (無感覚になった甘ったれ子) を演じさせるつもりだったのである。しかし 僕はジュアンを 地獄に果てさせるか それとも 不幸な結婚に終らせるか、—— どちらが、最も シビリア か、わからぬまま—— は しかとは 決めて いなかった。

このスペインの伝説は、これを Hell として告げている。しかし それは おそらく 他の国では単なる寓話にすぎぬものであろう。 貴兄には もう、僕の このテーマの何を意味したいかの 僕の見解、意中が 擱みえただろうね。”

無感覚になった寵児
<Gaté and blasé>, ジュアンは今、 ‘our young diplomatic sinner’ として存在する。(XI, xxix) 即ち この句は the Civil Service (XI-xli)— Byron 時代同様、我々の時代にも 関係ある—— について述べる文として我々を導いてゆく。

我々は ロンドンの活気ある場面へと導かれゆき あの優雅な上流貴族、知的女性から、文学的名声の運命 (バイロン自身及び、キーツの場合も含め) を経て、ロンドンの夜の生活へと華やかに招かれてゆき (Ixvi-lxxxii), さらに並列されて、揺れ動いてゆくのである。

Where's Brummel? Dished. Where's Long Pole Wellesley?
Diddled.

Where's Whitbread? Romilly? Where's George the Third?
Where is his will? (That's not so soon unriddled.)

And where is 'Fum' the Fourth, our 'royal bird'?

(XI, lxxviii)

ブルムメル はいずくに ? 敗北した

ロングポール ウェレズレイはいずくに? おちぶれた

フィットブレッドはいずくに? ロミィリ は?

ジョージ三世は いずくに?

彼の御綾威みいずはいずくに?

(かくたちま忽ち 消ゆべきではなかったのに)

そして 'ファム' 四世は いずくに ?

われら '王者として、翼もてか翔けし鳥' ?

(XI, lxxviii)

このすべては バイロンが——
ワーズワス
〈Wordsworthの自然についての理論づけ〉 に対して 哲学的に、そして
ボウルズ
〈Bowlesの‘不変の理論’ に対して美学的に 反対した かの〈移り気、変
り易きこと〉 のテーマの 社会的例証 なのである。

Mutability (気まぐれ、気の変り易きこと)こそ、 ‘陰気なロンドンの
丘を一過する風に吹かれて’ と唱った 12 Canto の 基調なのである。

しかし 12 Canto は 我々に ふたたび バイロンの主要な 三つの〈不変、
永遠〉のテーマの一つ Power〈力〉を 強調、力説する。

以前の理論を通して示したかったことは——バイロンの^力 power と^知 knowledge
と^愛 love の 三重のテーマが——最初は、《Hours of Idleness》への題銘
の中で述べられたが——如何に 関連的表現を見出すか、しかも、如何に、
《Childe Harold》、《the Tales》、そして劇、諷刺詩、そして minor poems
の中で、お互いに 随時 随所に 三幅対の相関関係を示しているかという点
を 示したいのである。

《Childe Harold》 は 主として 知識——自己を知る——探究の 巡礼者
なのである。《the Tale》の作品からは、〈知〉即ち〈英知〉は 消え失せて、
〈愛〉との葛藤において、〈力〉が 強調されている。 この〈力〉と〈愛〉
の 密接不離の関係は 多くのバイロンの 詩劇を通じて 執拗に繰返され
強調されて続くのである。

〈英知〉は表面には 浮上するも 結局は すばやく 付随して 矢継ぎ早や
に唱われる詩の中に 沈んでゆく。即ち《ダンテの予言》、《暗黒》、《タッ

ソーの嘆き》の中では そうなのである。

《The Island》は〈愛〉—— これは それ自身、〈実存主義の英知〉
ローレンス
即ち Lawlence の 邪悪の神 であるが、—— の力によって 〈Power〉
カ
を 打ちまかしている。

《Don Juan》には 全面的に——敢て そう言われても よいだろうが
——英知なるものは 欠如している。つまり ドン ジュアンには ‘人間
が何ものであるか を知ろうとする 権利 主張’ への 嘲笑に 取って替
わられている。

Conto XII では 先ず第一に〈金銭〉についての〈力〉なるものを 観察し
ている (i-xii)。

〈吝嗇家の至福〉 について興味ある評言をしている —— 彼らの歎び
は 絶対に飽きることを知らぬ よろこび なのである。

‘Jew Rothchild 及び 彼の仲間のキリスト教徒である Baring’, これら
ベアリング
そして 他の資産家たちは ‘世界のバランス を掌握している’ そして 謂
うなれば ‘ヨーロッパの帝王’ (v, vi) なのである。

我々は バイロンの幻想のvariety ^{サークル} が Annesley の ‘Cirque of trees’
アンズレイ
樹々の巡回 から ^{カデイス} Cadiz の闘牛場へと拡がりゆき、 さらに もう一度、
Loutrackey の 躍りつつあるスーリー 族の輪へとせばまりゆき、 再び、
大演舞場 及び セント ピーター寺院へと 拡りゆき、 かくて今や、 ‘ready
money’ の ‘the glittering cirque’ —— それは ^{アラディン} ‘Aladin のラムプ’ (vii) なの
であるが—— へと 絞られてゆく。

‘Serpent Reasonings us entice’
——蛇の誘惑が 我々を そそのかす——

第13節となると <力は 愛である> のモチーフ, (The Mansion House as 'a stiff yet grand erection') は転調して <金は愛である>, いや, 少なくとも <金は 愛を支配する>へと 移ってゆくが, これは, 以後の《ドン・ジュアン》の部分の 支配的テーマとなってゆく。

英国的結婚市場が つねに バイロンを魅了してきた。つまりバイロンがそのことについて 彼の わくわくするほどおもしろい 計画として Jane Austen の よりバランスのとれた こっけいな 批判と並べて 描いてみせた——のは, とても興味深く参考となる。

So Cash rules Love the ruler, on his own

High ground, as virgin Cynthia* sways the tides:

And as for 'Heaven being Love', why not say honey

Is wax? Heaven is not Love', tis Matrimony. (XII, xiv)

かくて現金が 支配者なる愛を支配す 自らの 高き基盤の上に,

処女なる ^月 キュンティア* が潮を支配する如く

かくて天が愛というなら こう言ってはどう?

蜜は蝨なり。天は愛ならず, それは結婚だ

* Cynthia は ギリシア神話の Artemis, ローマ 神話の Diana (詩) 月。処女性と狩猟の守護神。

Cynthia sways the tides

バイロンの必須, 欠くべからざる, 一部より全体に向く完全な心象の良き例。ある事が急ぎ進む場合, 見逃しがちである。'輝く巡回を翔ける, 不妊の月, それは, 天上の女王' として君臨し 性的本能と激情という潮を支配する。

Compel love (愛の世界でのゴリ押し) をする<黄金の威力> 即ち 金権が 結婚生活そのものにおいても大きく支配して、とどのつまりは、愛とは反対方向へと暴走する。金に愛は支配され 愛は金の奴隷とされる。妻が主権を握る。<嬖天下> hen-pecked hnsband<雌鳥が曉を告げる>。かくして gynacray 嬖天下 が続いておこってくる (Ixvii)。その嬖天下の世界の中で 引き続いて種々様々の<力>の類型を明確に区別しようと意図している。

中年女性が 青年に与える影響力が (バイロンはここで Lady Melbourne 及び Lady Qxford との彼の交友の経験から語っているのである) xliii-li 節で分析されている。

次に, lvii-lix 節の中では the power of 'report' — Shakespeare の ≪Much Ado, about Nothing≫のテーマ—— が 描かれている。そしてこれに接して the power of social intimidation (Ix-lxii) <威嚇の力>, the power of coquetry (Ixiii) <媚態の力>, そして, the final sanction of the breach of promise suit (Ixv-Ixvi) <求婚の約束不履行の最後の制裁> が続く。

バイロンの最もウィットに富んだ詩行が、この 'gynocracy' <嬖天下>の section の中で 現われてくる。

All matchless creatures — and yet bent on matches (liii)

Perhaps you'll have a visit from the brother,

All strut, and stays, and whiskers, to demand

What 'your intentions are?' (Ix)

And sends new Werters yearly to their coffin (Ixiii)

The loveliest oligarchs of our Gynocracy. (Ixvi)

すべて 類稀^まれな女——しかも縁組を焦がれ (liii)

その兄者が君を 訪ねてくることだろう、

あらゆるものを誇示し、つっぱり、頬髯^{ほおひげ}を貯え

そして “君の気持はどうなの？” とつめよる (lx)

そして送る、毎年、新しいウエルテル達^{ひつぎ}を棺へと (lxiii)

かの美しき独裁者達は、 我らが婦人政体の (lxvi)

Canto XIII は 一連の〈償い〉の篇——それは 我々を 我々がもつ如き、この詩の終結へと運ぶ——を展界し始める。

ジュアン 及び彼のすむ社会に対する代償作用の必要性が 次第に明瞭化されてきて、ジュリア、ハイディ、そして長いポート、ジョン・ジョンソン、さらに カザリン女帝に具現化された 〈生の諸の現実〉が〈権力 を貧弱化された〉 英国の場面の中で 彼から離れてゆく。

‘分別の世界の 乾き、／空想の世界の明渡し／ 霊界の不活動’ cantol の stanza iで 始めて用いられた ‘pantomime’ の語が 今や 文字通りの意味を展界する。次に唄う句は〈虚飾〉、〈妥協〉、そして〈無気力〉の世界なのである。

With much to excite, there's little to exalt;

Nothing that speaks to all men and all times;
 A sort of varnish over every fault;
 A kind of common-place, even in their crimes;
 Factitious passions — Wit without much salt —
 A want of that true nature which sublimes
 Whate'er it shows with Truth; a smooth monotony
 Of character, in those at least who have got any. (XIV, xvi)

たかぶる情^{ところ}あれど 高揚されるものなく。

一つとてなし、全人に、全時代に語りかける。

あらゆる過誤^{あやまち}を 糊塗するニスだ 一種の

あらゆる犯罪の中でも 陳腐^{たぐい}の類 さ

偽れる情熱は ——ピリッとしないウィットで——

それが示す凡てを 真実もて昇華しえない

真実^{まこと}の性格の欠如するもの。起伏なき単調な

性格、少くとも何か摑んだ人々のもつ (XIV, xvi)

数多くの、真実の代替物が見出される。無関心、無頓着は 苦しみに備えるべき要塞^{とりで}として培われてゆく (xxxv)。そして栄光とは ‘渡金^{メツキ}された雲’ (XIII) なのである。宗教 及び 政治についての論争は、刺激剤として歓迎されている。つまり、

The joys of mutual hate to keep them warm,
Instead of Love, that mere hallucination. (XIII, vi)

憎しみ合う^{よろこび}歎こそ 相互^{かたみ}に温く保ち合い

単なる幼想にすぎぬ 愛にとって代るもの

これは 屋内文明を述べたにすぎぬが、そこでは、男と女がしっかりと結ばれたサークルの中で暮し、風上の厳しさから庇護されている (XIII, xlii-xliii)。

(木炭ならぬ) 石炭火 (南部地方に舟で搬ばれた)、そして 購われてきた極上、よりぬきのワインが 十二分に地中海の太陽を償ってくれるのである (XIII, lxxvi-lxxviii)。

‘快樂と倦怠’の Paradise 楽園となり果てた イングランドの中で boars (去勢しない雄豚) が bores* (うんざりする人物) にとって代られている (lxxxiii)。

* bores (うんざりさせる人種) と blue (高慢ちきな知的女性) は、ロンドンの幸せを害なう 大いなる二つの敵である、と バイロンは いつも 口癖の如く呼び続けてきた。

しかし bores (たいくつ、うんざりさせられる連中) は 除去されていた。‘親しき仲間は チェス盤 である’ とバイロンは ある名人芸に感動して 我らに 語る。だが誰の名人芸なのかは 敢て 憶測しようとはしない (lxxxix)。‘Blank-Blank Square の 当時の Henry 卿の館は、そしてそれから以後の Norman Abbey は 多くの知己を集め——^{気取り屋(寓か者)} ‘coxcombs’ の群衆には 安全性がある’ ——だが、友は一人もない。主人役の Henry 卿は 彼が

坐る ‘square’ (チェスのます目) の如く ‘blank-blank’ (無表情) である。

即ち 彼の人柄は

A man known in the councils of the Nation,
Cool, and quite English, imperturbable,
Though apt to act with fire upon occasion,
Proud of himself and her: the World could tell
Nought against either, and both seemed secure —
She in her virtue, he in his hauteur. (XIII, xiv)

国会では 知られた男 クールで

きわめて英国的, 冷静 沈着で

もっとも時に 情熱をもやし行動しがちで

みずからと彼女を誇る。世は語り得なかった

二人に不利な事は。故に二人は無事に思へた——

彼女は美德を備へ 彼は尊大に構へた。

そこまでは、それでよい。ふつうは、クールで 時折 燃える男は——
人はそう考えるのが常だが—— 単なる、とるに足らぬ、つまらぬ人物では
ない。だがバイロンは彼の肖像画を顕出するに際し、‘熱情’は‘主義’即ち、
‘偏見’によって 決定されることを 示唆している。

when once his judgment was
Determined, right or wrong, on friend or foe,
Had all the pertinacity Pride has,
Which knows no ebb to its imperious flow,
And loves or hates, disdainng to be guided,
Because its own good pleasure hath decided. (XIII, xvi)

…………… ひとたび 判断が、敵、味方に

良かれ悪しかれ、 下されて しまうと

あらゆる剛情は 誇りをもつものだ

そして、その傲慢な流れに対して干潮を知らず

愛し、憎しみ、 導かれることを蔑すむ、

自らの 良き快樂は 決定済みだからね。 (XIII, xvi)

‘彼の先入観は ペルシア人の掟の如く、そして メディア人の掟の如く、決して、先行したものを取り消し 無効にすることはしない’ とバイロンは言葉を加える。

換言すれば バイロンは<知性>を<厳格>と置き換え、フォスターの小説の永久的 パブリックスクールの男生徒のように 掟によって生活し、新しい環境からではなく、古き 紋切型から 反応するのである。

我々は 流動的変り易い 地中海の情熱からは、およそ程遠き 化石化された世界にいて、 Henry 卿は、これまでは バイロンの登場人物の名簿の中では リストに載せられていない ‘気質’ の人物である —— 勿論親近感の欠如のせいからではないが。 バイロンは 彼の名声をほしいままにした得意絶頂の時代、多くの、そのような、つめこまれた、まがいものを多く経験してきている。‘Haud ignara loquor’ と彼は意中を述べている (XIV)。

しかし それらの straw personae (価値なき登場人物) は レバンティンそしてイタリアの ^{いろいろ} 火爐で すっかり焼かれてしまっていた。さて ‘mental theater’ の舞台へと 戻ってゆく。そして 益々募りゆく重要な役割を果すのである。

《Don Juan》の それ以後の Canto が、そもそも 続篇として 描き続けられていたとすれば 我々に〈偽善〉、〈空念仏〉、〈虚飾〉の世界について 名人芸としての 大パノラマを繰り展げて観せていただろう。

レディ アダリーン
Lady Adeline は (その美德を Lord Henry は とても信じていた 配偶者だが) より複雑で、より好感のもてる女性である。だが 彼女は亦、ジュアンが かつて会ったことがない程の、宿命的美女である (XIII, xii)。

Queen-Bee は ‘美しい全てをうつす鏡であり、……’ (xiii)。^{薬用植物} ‘鏡は’ は美しきものから、その〈密接性〉を奪いとるものである。Queen-bee は ^{ミツバチの巣箱} officinal をほのめかし、‘factori line’ は ‘hive world’ を意味する。

これら二人は、不安な 社会的保証の中であって、 自身、寄生虫に取り囲まれている。ごっちゃませの、雑多な連中仲間が Abbey に集められる (lxxix-xciv) そこには、 大いに陽気、歓楽は 漂うが ウィットには、きわめて乏しい仲間である。

Society is now one polished horde,
Formed of two mighty tribes, the Bores and Bored. (XIII, xcvi)

社会は今 一つの洗練された大群からなる

二つの巨大な部族、退屈させるものと退屈者と

bons mots 美辞、警句 が あらかじめ 研究され 暗気されている。
その妙技ゆえに 会話の魅力が 多くの迂余曲折を経て 二人が 洞窟の中へ
運ばれてゆく点まで 誘導、展界されてゆく (xcviii)。このことゆえに デ
ィナー テーブル での、ほんもののウィットに代るべきものとして 役立つ
のである。しかし 田舎家のパーティーで ^{アーンニョイ} ennui (倦怠感) を はねっ
かえすべく、十分なものは なにひとつないところでは、その過される一日
には<莫大な時>の拡がり が のこされているのである。

The elderly walked through the library,
And tumbled books, or criticised the pictures,
Or sauntered through the gardens piteously,
And made upon the hot-house several strictures,
Or rode a nag which trotted not too high,
Or on the morning papers read their lectures,
Or on the watch their longing eyes would fix,
Longing at sixty for the hour of six. (XIII, cii)

中年男が書齋を 歩いてゆき

書物をひっくり返したり 絵を批評する

のらりくらり庭を 情け深く うろつく

温室に いくつかの 酷評を あびせ

早駆けできぬ老いぼれ馬を のり廻したり

自分の 講義のため 朝刊を読み

もの待ち顔で 時計を眺め

六時が 六十時の如く 待ち遠しい

the hour of six つまり、ディナーの時刻のことだ。

‘地球全体は われわれの病院なのである’ と <East Coker> の中で Eliot は 述べているが、病から、外科手術から 恢復するため入院生活を送ったものは 誰でも知っているが、退屈を逃れるため 食事の時間が待ち遠しくてしかたない。

この意味で Norman Abbey で バイロンは ある種の田園サナトリウムを、分別を失った人々、うまくかみ合ねぬ人々、神経症患者達のための看護ホームを 描写しようとしているのである。

即ち これは Eliot の ‘the whole earth’ (全地球) の無[・]限[・]性へと拡がりゆくバイロンの ヴィジョン なのである。Eliot の ‘破滅の億万長者’ アダムは ここでは 描かれていない。つまり バイロン詩では、アダムの姿を探し求めるならば聖書に関する劇、或いは 其地多くの, minor verses —— <<ダンテの予言>>, <<暗黒>>, <<ヘブライ調の詩>> —— に遡らねばならない。

しかし ‘Burnt Norton’ — T. S. Eliot の詩—はやはり この件りと関連をもつ。

‘充実 でもない放心でもない, 只の 明滅

緊張した, 時に虐げられた顔をおおう

ゆがみ, ねじれから 取乱した

空想に充ち, 意味のない

集中力の一切ない, ふくれ上った無感動……’

この passage の中で ‘eating’ のテーマが, 戻ってきて Canto XIV が始まり, ‘the Titan の朝食’ が 導入され この場面で 一つの 組織体が 別の組織体を すっかり喰いつくす (i, ii) そして あまりにも 形而下的なもの (物質的なもの) が 形而上的 (抽象的) なるものと関連をもつのである。(Old Saturn ——(ローマ神話) サートゥルヌス。農耕の神, Jupiter 以前の黄金時代の主神——が 彼の後継者を食べたのは 性的嫉妬 のためだった) 性的—政治的—詩的テーマ をもつ極めて微妙な 一つの劇が この篇を活気溢れるものとしている。 女性が 諷刺的に擁護されている。

Alas! worlds fall — and Woman, since she felled
The World (as since that history, less polite
Than true hath been a creed so strictly held),*
Has not yet given up the practice quite.
Poor Thing of Usages! coerced, compelled,

Victim when wrong, and martyr oft when right,
Condemned to child-bed, as men for their sins
Have shaving, too, entailed upon their chins, —

A daily plague, which the aggregate
May average on the whole with parturition. —
But as to women — who can penetrate
The real sufferings of their she condition? (XIV, xxiii-xxiv)

嗚呼！ 世界は滅びる——女が世界を打倒して以来、

（優雅よりも真実なる、かの有史以来

厳しく守られてきた 信条だったように）

女は その慣行を 全面的には捨てていない。

慣行に哀しく弄ばれ^{もてあそ} ！ 強要され、強制され

誤れるときの犠え^{いけに}、 正しきときは屢々殉教者

産褥へと運命づけられ、 男は 原罪ゆえに

あごに ひげそりを 亦、課せられる

日々の疾病、それは 総計して

概して分娩と 平均値に達するだろう

だが女については——誰に 見抜けるかが

彼女が調節する 彼女らの真の苦しみを？ (XIV, xxii-xxi)

* バイロンの聖者から引用した擬古体は注目、検討に値するが、バイロンが、たとえば、hath, doth, sayth, etc の形を使用するときは、概して、ironic 諷刺的か さもなくば 宗教的に容認 に関するものに言及し、強調せんとする意図を示す。 例えば “十戒” “山上の垂訓” 等。

天空に大きな夢をかけたバイロン、その大きな夢が バイロンの生涯を、波乱万丈の生涯を織りなした、創造したのである。

〈知——力——愛〉の三重唱が奏でるトーン、韻律……就中、〈愛〉のテーマは バイロンにとって 切り離し得ない、最大の主旋律であった。 みずからの生涯を、己の瞬間の心の揺らぎ、sensation の起伏を、ありのままに、偽ることなく、豊かに 語りつつ、見事に、描いて見せた、自画像こそ ≪Don Juan≫なのである。 祖国英国を、ヨーロッパを、世界状勢を、モラルを、政治を、偽善を、空念仏を、悪を、戦の冷酷さを、民族の争の醜さを 凝視しつつ 自己の方寸のカメラに鮮明にキャッチして 古今東西の読者に 訴えている。そして、かく人生を生きよ と範を垂れた。 史上 類稀れな、人類愛に燃えたコスモポリタン、バイロンは、自ら、はっきりと言明した。 ≪ドン・ジュアン≫を世間は、〈悪魔の書〉 〈背徳の書〉 〈怪物〉 なる如く評するも、 よろめきながら 産ぶ声をあげた ジュアンこそ 実は 最も道義的、偽らざる〈自然児〉なのである と 誇り高く、告白している。

——(続、次号)——

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge: The Poetical Works of Lord Byron: Vewis Prints.
- 3) Leslie, A. Marchand: Byron's Poetry, John Murray.
- 4) Francis, M. Doherty: Byron.
- 5) John, D. Jump: Byron, Rontledye and Keygan Paul.